

## 解答例と解答のポイント

### 問1

#### <解答例>

まず仏教の話から始めよう。仏教は、(我執を去り) 運命に身を任せるという平常心(感覚)、つまり、避けることのできない運命に対して、冷静に服従する心を与えてきた。それは、危険や災難に直面した場面でのストイックなまでの落ち着きや、生への執着を捨て、死を自らに引き受けるという感覚である。ある剣道の達人(第一人者)は、彼が伝授しようとした技の極意を体得するに至った弟子の姿を見てこう言った。「これ以上のことは私の教えの及ぶところではなく、禅の教えに譲らねばならない」。「禅」とは、デイヤーナ(瞑想)にあたる日本語であって、「言語による表現の範囲を超えた思想の領域に、瞑想を通して到達しようとする人間の努力を意味する」。その方法は沈思であり、その目的は、私が理解する限りでは、あらゆる現象の底に横たわる原理や、可能であるとするならば絶対そのものを確知し、それを通して自らをこの絶対との調和に至らしめることにある。このように定義すれば、禅の教えは、一宗一派の教義にとどまらず、絶対的なものに到達する者はだれでも、現世の俗事を脱し、「新しい天と新しい地に」目覚めるのである。

### 問2

#### <解答のポイント>

新渡戸の物の見方は、次の点で垂直軸的な「特殊即普遍のパラダイム」を有する。

①普遍内在論をとること。②普遍(絶対)に向けた変容に際して、③自意識への注目(内観)や④我執の除去(虚・自己尺度の否定)という⑤思考作用を経て、⑥主客の合一(絶対との調和)・心の平安・善の体現がめざされること。

### 問3

#### <解答のポイント>

(人名)

類似の思想家としては、ソクラテス、プロティノス、王陽明、中江藤樹、西田幾多郎、鈴木大拙、和辻哲郎、井筒俊彦などを挙げることができる。

(思想の概要)

たとえば、「分けない物の見方(主客の対立を超えた普遍と特殊の即応)」を論点とする場合、次のような記述を思い浮かべて解答することができる。

西田幾多郎(『善の研究』岩波書店)

著作権保護の観点から、公開していません。

著作権保護の観点から、公開していません。

和辻哲郎 (『人間の学としての倫理学』岩波書店)

著作権保護の観点から、公開していません。

鈴木大拙 (『禅と日本文化』岩波書店)

著作権保護の観点から、公開していません。

井筒俊彦 (『意識と本質』岩波文庫)

著作権保護の観点から、公開していません。

開設分野	日本史学
------	------

## AO入試【総合評価方式】Ⅲ型 総合問題解答例

〔I〕

平安末・鎌倉初期に、新たな仏教を求めて南宋に渡った栄西によって「喫茶」の文化が禅宗（臨済宗）とともに日本にもたらされた。南北朝・室町期には「寄合」（よりあい）の文化のもと、茶を飲み分けて掛け物を争う勝負事の「闘茶」が流行した。室町後期に勃発した応仁の乱（1467～1477）は十年以上に及ぶ戦乱だが、それを体験した人々の心には美意識の変化が生まれた。「唐物」と「和物」の取り合わせを大切にす村田珠光の精神を受け継いだ堺町衆が武野紹鷗であり、彼に師事した千利休が「わび茶」を完成し、これが近世以降の「茶道」につながった。

なお、古代・中世の国際貿易都市博多では、11世紀半ば以降、交易のため宋商人が来航・居住しており、栄西より前に生活文化の一部として「喫茶」文化が伝えられていたことが、近年の博多における発掘調査で判明した。

開設分野

日本史学

## AO入試【総合評価方式】Ⅲ型 総合問題解答例

〔Ⅱ〕

鎌倉時代以降、博多・鎌倉・京都を中心に禅宗寺院が多数建立され、禅宗そのものだけでなく、それに関係する文化が禅宗文化として日本に流入する。その結果、京都の東福寺や相国寺には宋・元時代の中国水墨画が大量に蓄積され、寺内に絵画工房が誕生する。やがて両寺院には優れた画僧(絵仏師)が登場する。すなわち東福寺の明兆(みんちょう)と相国寺の周文(しゅうぶん)である。

幼い頃から絵画の才能に秀でていた雪舟は、相国寺に入門して周文に師事する。水墨画の本場である中国(明)で学びたいと思った彼は、遣明船に乗って明に渡り腕を磨く。そして帰国後は、国内各地を旅し、中国の風景・人物だけでなく日本の景観や四季の移ろいを題材とする水墨画を書き残した。まさに日本水墨画の誕生であり、四季山水図(山水長巻)や天橋立図が代表作として知られる。

開設分野

東洋史学

## AO入試【総合評価方式】Ⅲ型 総合問題解答例

(I)

## 【解答例】

中国にとって近代国家の形成は、多民族を含んだ広大な「帝国」の版図、「散沙」(孫文)のよう  
に散漫な人民などの諸要因により、多大な困難を伴うものだった。

清朝末期に、中国は洋務、変法、新政という一連の近代的改革を実施した。これらの改革は、  
当初は明治維新以降の日本の諸改革と競合するものだったが、変法以降は明治日本をモデルにし  
て立憲君主国家をめざすものへと変化していった。辛亥革命によって清朝が滅んだ後、共和制の  
中華民国の下でも近代国家形成の努力は続いた。袁世凱政権の改革もまた、日本の近代国家形成  
をモデルとしていた。しかし、日本の21か条要求によって彼の政権の権威は失墜し、帝政の復  
活を目論んだために途中で挫折せざるを得なかった。一方、国民党政権の改革は、親英米的な路  
線の下で、民族主権の回収、工業化、財政・金融改革等において見るべき成果を残した。だが、  
これも山東出兵・満洲事変から日中戦争に至る日本の侵略によって中断を余儀なくされた。

日本の圧力や侵略は、中国の近代国家形成に常にブレーキをかける役割を果たしたが、他方に  
おいて中国に民族的・国民的な一体感を生み出すことにもなった。近代の日本は、その意味で中  
国ナショナリズム形成の触媒になっていた。そしてまた、そのために日本は、中国の近代国家形  
成の過程で、救国＝強国化のため権力を集中する独裁体制が生み出されていくことを間接的に助  
長してもいたのである。

開設分野	東洋史学
------	------

## AO入試【総合評価方式】Ⅲ型 総合問題解答例

〔Ⅱ〕

## 【解答例】

中国社会において、もっとも重要な非家族的関係は、疑いなく師と弟子との関係である。時に師弟間の関係は、「一日師と仰げば、一生父と慕う」ということわざが証明するように、重要さにおいて夫婦関係、もしくは兄弟関係さえもしのぐものであった。そのような師弟関係が存在する時はいつでも、それはしばしば役に立つ政治的な強みとなった。

開設分野

西洋史学

## AO入試【総合評価方式】Ⅲ型 総合問題解答例

### 問Ⅰ

17世紀中葉のトゥールーズ大司教ピエール・ド・マルカの大部の著作以来、のちのカタルーニャ北部に相当する地域は、8世紀後半に同地域を征服したカロリング朝フランク王国によって「ヒスパニア辺境領」(わが国では「スペイン辺境領」という呼称をもって編入されたと考えられてきた。だが、この呼称の用例はルイ敬虔帝治世の820年代という限られた時期にわずかに15例、しかもその大半が官廷編纂の叙述史料に集中していて、現地の史料にはいっさい登場しない。この年代はちょうどフランク軍がひとたび申断していた南方侵攻を再開させる時期に相当するが、これと並行してローマ期以来のヒスパニアはアンダルスのみを指すものとして認識されていて、「ヒスパニア辺境領」は、「王国」にもアンダルスにも含まれない空間とみなされている。

その実態は、かつて想定されていたように、フランク王国の「辺境伯」が管理する統一的な政治的枠組みではなく、諸伯によってそれぞれ差配される複数の伯領の寄せ集めでしかなかった。しかも、なぜか王権に繰り返し反旗を翻すフランク系の伯と、逆に王権に誠実を尽くした西ゴート系の伯が現地の西ゴート人やムワッラド(改宗ムスリム)と連携して、互いに伯領を奪い合うという、奇妙なねじれ現象がみられた、王権からすればおよそ制御しがたい空間であった。それゆえ、フランク王権にとって「ヒスパニア辺境領」とは、理念上は王権に政治的に服属しながらも、空間的には依然として「王国」の外にあるおよそ制御不能な、だからこそ安定的に統合されなくてはならない空間とみなされているのである。

### 問Ⅱ(1)

グレゴリウス7世は1073年にローマ教皇に選出されると、当時横行していた聖職売買と聖職者の妻帯に断固たる態度を示し、聖界の改革運動に着手すると同時に、帝国教会体制にもとづき帝国支配の強化を図る神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世と激しく対立して、いわゆる聖職叙任権闘争の端緒を開いた。教皇は1076年、ハインリヒ4世に破門を宣告し、国内諸侯の反抗を受けて苦境に陥った皇帝に、いわゆる「カノッサの屈辱」(1077年)に耐えることを強いた。だが、国内諸侯を鎮圧した皇帝が1080年に攻撃を再開し、グレゴリウスの席位を決行したため、最終的にローマを追われている。「グレゴリウス改革」と総称されるその聖界改革運動は、聖職叙任権や私有教会制を筆頭に、当時の教会の実態と相容れないものであったため、近年では各地に与えた影響をして「グレゴリウス改革」ならぬ「グレゴリウス危機」と呼ぶこともある。

開設分野

西洋史学

## AO入試【総合評価方式】Ⅲ型 総合問題解答例

## 問Ⅱ (2)

ローマ教皇グレゴリウス7世は、偽書として知られる「コンスタンティヌスの寄進状」の内容にもとづき、ヒスパニアの王国が古代以来、ローマ教皇庁に正当に帰属するものと主張した。それゆえ、キリスト教徒の諸国王が半島を征服することを祝しながら、イスラーム侵攻によってひとたび失われた、ローマ教皇庁への奉仕を果たす(しばしば貨幣で納付する)よう迫った。すなわち、ムスリムによって半島が数世紀にわたって占有されていても、半島に対するローマ教皇権は依然として有効であると認識しており、征服された領土はローマ教皇の封土として、したがって諸国王はローマ教皇の封臣であると主張したのである。

## 問Ⅱ (3)

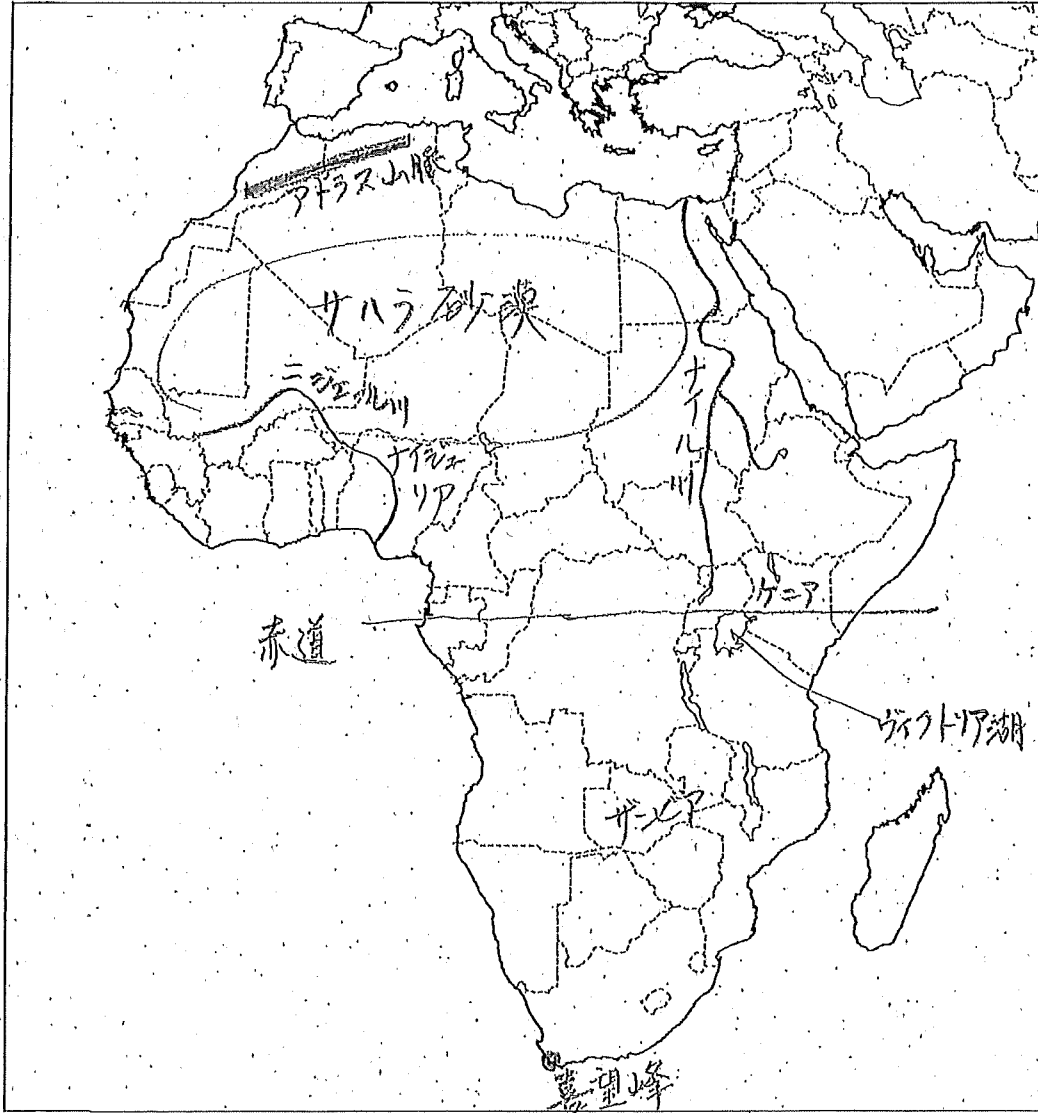
カスティーリャ＝レオン国王アルフォンソ6世は、「全ヒスパニアの皇帝」「ヒスパニアのあらゆる民族の皇帝」と号することで、諸国家・諸民族・諸宗教からなる半島全土に対する自らの覇権を主張した。それゆえ、レコンキスタという半島固有の理念は、征服された領土をローマ教皇権の封土とみなすグレゴリウス7世の主張と相容れるはずもなかった。



開設分野	地理学
------	-----

AO入試【総合評価方式】Ⅲ型 総合問題解答例

問Ⅰ



問Ⅱ

①  $(6.23-5.31) / 5.31 \times 100 = 17.32$       17.3%

②  $(5.86/6.23) \times 100 = 94.06$       94.1

開設分野	地理学
------	-----

## AO入試【総合評価方式】Ⅲ型 総合問題解答例

## 問Ⅲ

「人口密度」は、1平方キロメートル当りの人口として定義され、特定地域における人口の集中を示す重要な人口指標である。2011年センサスの暫定人口総計によれば、インドの人口密度は、2001年の1平方キロメートル当り325人から、同382人に増加した。平均すれば、10年前と比べ、国内のすべての単位平方キロメートルで57人多く住んでいることになる。

## 問Ⅳ

ゼミナールの内容を踏まえ、以下の事項が正しく理解できているかをみる。

- ・緑の革命。特に、小麦・米の生産増加、高収量品種の導入、必要な条件、地域的特性、その課題など。
- ・白い革命。ミルク生産の増加、水牛の重要性など。
- ・ピンク革命。鶏肉消費の増加、鶏肉が好まれる文化的理由など。

開設分野

考古学

## AO入試【総合評価方式】Ⅲ型 総合問題解答例

問Ⅰ

(1)

古墳時代の埋葬施設は大きく2つのタイプに分けることができる。それは竪穴式石室(石槨)と横穴式石室である。横穴式石室は通路(羨道)と主室(玄室)からなり、ヨーロッパの羨道墳に似ている。また一方で、竪穴式石室には墳丘頂部から垂直に掘削された竪穴に置かれた木棺がある。弥生時代、最高位の首長の埋葬施設は木槨のなかに(組合せ式木棺か丸太を割って作られた木棺か、どちらかの)木棺を入れたものであった。それは墓の墳丘盛り土の上から垂直に掘削された竪穴に置かれた。だが、古墳時代当初から丸太を割って作られた木棺(割竹形木棺)を埋納する竪穴式石室が最高位の首長たちによって使用されるようになった。この竪穴式石室は、紀元後3世紀の半ばから紀元後5世紀後葉まで、ほぼ250年ものあいだ、使用し続けられた。4世紀の半ばには(竪穴式石室に)石棺が採用され始めた。古墳時代後期のはじめには古墳の葬送儀礼の手順に技術的な変化が起こった。つまり、それは横穴式石室の導入である。韓半島の百濟からもたらされたと考えられており、その後、埋葬施設の標準的なスタイルとなった。

(2)

横穴式石室のことを示している。古墳墳丘の横に被葬者の遺骸と装身具や副葬品を納める玄室(主室)を造り、それに入り口からつながる羨道(通路)を造りつけた石積みの墓室のことをいう。

(3)

横穴式石室の導入のことを示している。竪穴式石室(石槨)は、被葬者の遺骸を密閉する施設である。一度埋葬を行うと次に追葬が行えない構造上の特徴がある。しかし、横穴式石室は羨道入口付近にある閉塞石等を除去することで追葬が可能な構造をもっている。韓半島(朝鮮半島)から伝播したが、日本列島においても死後の世界観に変化があったことや、男性首長の系譜が重視されはじめた社会的状況が葬送儀礼に変化をもたらしたと考えることができる。

開設分野

考古学

## AO入試【総合評価方式】Ⅲ型 総合問題解答例

### 問Ⅱ

弥生時代前期から中期には、ひろく木棺直葬が一般的であったが、九州地方北部ではかめかんぼが普及した。また、九州地方東部から中国地方西部では、箱式石棺（箱形石棺）が用いられることも多かった。

木棺は組み合わせ式のもので、小口板を地面に差し込み、その両側を側板で挟み込む形態が主流となった。のちには丸木舟のような形態にした木棺もみられるようになった。

弥生時代後期、現在の島根県や岡山県などの地域では木棺を木槨で覆い、それを大きな墓壇に埋め置く大がかりな埋葬施設が作り出された。装身具をまとった被葬者の傍らには鉄剣などが副葬される場合もみられるようになった。

古墳時代初頭、奈良県にあるホケノ山古墳では、木棺を朱塗りの木槨で覆い、さらにそのまわりに石を積み上げて木槨を覆う石槨を構築して、特別重厚な埋葬施設を作り出した。木棺や木槨を覆う石囲いの埋葬施設は、古墳時代前期の前方後円墳などにみられる竪穴式石室（石槨）へと変化していったと考えられている。

### 問Ⅲ

前方後円墳は前方後方墳や方墳、円墳などといった古墳形状のうち、最上位にあるとされる。

広島県東広島市の市街地には、3基の古墳で構成される三ツ城古墳群がある。丘陵の先端部分を利用して築造された。なかでも三ツ城第1号古墳は全長約92メートル、後円部の直径約62メートル、高さ約13メートルとなる前方後円墳である。古墳のくびれ部には、祭壇と考えられる四角い土壇状の造出しがある。

三ツ城第1号古墳の後円部の墳頂には3基の埋葬施設がある。第1号埋葬施設および第2号埋葬施設は箱式石棺（箱形石棺）に板石の囲いをし、その周りに石を配置した特殊な形態であった。第3号埋葬施設は箱式石棺で、棺内からは鉄剣や玉類が出土した。また、棺外から多量の鉄鏃が出土した。

墳丘は3段に築かれていて、各段には、円筒埴輪や朝顔形埴輪、まねがき蓋形埴輪などが立て並べられていた。このほか家形埴輪や短甲、冑、盾、鞆、鶏などの形象埴輪も樹立していた。

三ツ城第1号古墳は、5世紀前半ごろに築造された安芸地域の大豪族の墓と考えられている。